

## 意外性の三木先生

村松 賢一

三木先生に初めてお目にかかったとき、がっちりした体格と迫力ただならぬ顔から、とっさに叡山の荒法師を想った。だから後になって、スキーがお得意であるとか、その昔野球少年でかの長島を三振に打ち取った投手からホームランを打ったのがご自慢だと聞いたときは正直びっくりした。何しろユニホームよりは柔道着、スキーのストックよりは薙刀を抱えたお姿のほうがずっと似合う方だ<sup>かた</sup>と思い込んでいたからだ。

三木先生とは、通勤の路線が同じだったのでたまに池袋駅でばったりお会いし、大学までご一緒させていただくことがあった。そんなときの先生は大変寡黙で騒々しい車内でも小さなお声でぼつりぼつりと話された。ただ、当方に中世文学の素養が不足していたこともあり、その道行はなかなか談論風発とはいかなかった。だから、先生が、教育番組で講師をされていると知ったときは正直意外だった。早速テレビをつけてみると、画面の中の先生は、相変わらず少しはにかんだご様子ながら、うって変まって雄弁であった。しかし、そのお話し振りは、「聞け、聞け」といわんばかりの多くの講師とちがい、「私の知っている限りのことをお話しますので興味のある方は聞いてください」とでもいうようにあくまでも控えめであった。早過ぎず遅すぎず、ちょうど頭の中に絵が描けるテンポに乗せられお話をうかがっていると、「この歌（「見わたせば 花ももみじもなかりけり 浦の苫屋の 秋の夕暮れ」）は、季節的にも、秋の夕暮れという、暗い、陰影に富んだ時間、空間の中に、ある不思議な感動を覚えてしまったということを詠っています」といった香気のある表現が随所にちりばめられていて、気がつくやうに、いつしか文学の魅力にしっかりとらえられているのだった。三木先生の意外なお顔はこれに尽きない。たとえば、スピーチ。謹厳重厚な面持ちからは想像しにくかったのだが、大変なユーモリストでいらっしゃる。いろいろな場でスピーチを拝聴したが、おざなりなお話は一度としてなく、いつも、その時、その場に合った内容をユーモアたっぷりに話され、私たちに大いに笑わせてくださった。聞き手を喜ばせることを常に考えておられたのである。

多分、あたらしい職場で、かつての小生と同じような驚き、感慨をもって先生と接している人々が大勢いるはずだ。それを思うとちょっと自慢したくもあり、少し口惜しくもある。